6/14 朝刊

円安24年ぶり 一時135円前半

週明け十三日の東京外国為替市場で円相場が一時一ドル＝一三五円台前半に値下がりし、金融危機に陥っていた一九九八年十月以来、約二十四年ぶりの安値を付けた。前週末に発表された五月の米消費者物価指数の伸び率が四十年五カ月ぶりの大きさとなり、米国がインフレを抑えるため利上げを加速するとの見方が強まった。低金利を維持する日本との間で、金利差が拡大すると見込んだ投資家が、運用に有利なドルを買い、円を売った。＝論説⑩面

日銀が公表したこの日の円の最安値は一ドル＝一三五円二〇銭だった。複数の大手銀行は取材に、一時一ドル＝一三五円二二銭まで下落したと答えた。

東京株式市場の日経平均株価（225種）終値も前週末比八三六円八五銭安の二万六九八七円四四銭と大幅安で「日本売り」の様相となった。円安は自動車など輸出企業が外貨で稼いだ利益を円建てで膨らませる効果がある一方、食料など幅広い輸入品の値上がりを招き、家計に逆風となっている。

午後五時現在は前週末比一円〇〇銭円安ドル高の一ドル＝一三四円五九～六〇銭。ユーロは一円〇八銭円高ユーロ安の一ユーロ＝一四〇円八七～九一銭。

米国の金融政策を決める連邦準備制度理事会（FRB）は十四、十五両日の連邦公開市場委員会（FOMC）で大幅な利上げを決める見通しだ。